福祉文教常任委員会　視察報告書　　令和8年8月5日（水）～8月7日（金）　山形県

福祉文教常任委員会　小口　智世

1　高畠町議会
「オーガニック給食・オーガニック宣言について」
高畠町では、国のオーガニックビレッジ政策を受けて初めて有機農業を始めたのではなく、1973年頃から約50年にわたって有機農業に取り組んできた。オーガニックビレッジ宣言についても「今さら感があった」が、50年という節目に宣言した。有機農業を始めたきっかけは、「生産者自身が農薬によって体調を崩すような農業でよいのか」「そうして作ったものを消費者に食べてもらってよいのか」という農家側からの問題意識があった。現在、水田では除草作業の負担が非常に大きいことから、有機栽培面積が減少傾向にある。このため高畠町では、紙マルチ、アイガモ、除草機などの利用にも取り組んでいる。高畠町では、有機農産物が都市部へ出荷され、町内の住民がなかなか購入できないという矛盾があった。そこで、地産地消につなげるために「まほろばの実り」という地域認証制度を作った。外部機関に高い費用を払って審査してもらうのではなく、生産者同士が農場を訪問し、消費者など生産者以外の人も加わって相互に確認する仕組みにした。学校給食については、根菜などの有機野菜を使った企画給食を3日程度実施し、有機米についても年3日程提供している。高畠町には小学校6校、中学校1校があり、すべて自校調理方式。すべての学校に畑または田んぼがあり、児童が農作業を体験している。　中学校には「農業生産部」という部活動があり、自然農などを取り入れながら、豆などの栽培や土づくりをしている。

説明をお聞きして、農家の高齢化や有機農産物の採算量不足など、箕輪町と共通の課題があることを感じた。中学校に農業の部活があるということから、子どもたちの農業への関心が高さが感じられるが、これは、行政主導ではなく農家が自主的に有機農業に取り組んできた結果ではないかと思った。生産者をどう育てるか、認証制度の在り方など、箕輪町でも参考にしたい。

2　鶴岡市　社会福祉法人月山福祉会
「農福連携・就労相談窓口の取り組みについて」
月山福祉会は、福祉会自体が認定農業者として農地を所有・賃借して農業を行っており、その経験を生かしながら、JAや地域の農業者等から農作業を受託するなど、障害のある人や就労に困難を抱える人が地域の農業に関わる仕組みを構築している。力のある利用者が農作業を行うことで、農家だけで行うよりも短期間で作業を終えることができた事例なども紹介された。農福連携を進めるためには、福祉関係者だけでなく、行政の農政部門、JA、農業者、障害福祉施設など、多様な主体が関わることが重要なため、月山福祉会では、意見交換や連携の場を通じて農業関係者に農福連携の意義を伝えてきた。また、畜産へも事業を展開して、福祉利用者のためだけの作業として農業を行うのではなく、農業そのものを一つの事業として成立させようとする取組が行われてきた。月山福祉会では引きこもり状態のある人への支援も行っており、まずは家族との関係をつくることから支援を始めるとのこと。ひきこもり支援の最終的な目標について、「最終ゴールは就労ではなく、自立である」という説明があった。

特に印象的だったのは、「就労すること」そのものを最終目的とせず、本人が自らの生き方や進路を選択できる「自立」を目標としている点である。また、農福連携についても、福祉側が農業に協力を求めるだけではなく、農業者の人手不足や生産性向上という課題にも応えることで、双方にメリットのある取組として継続させようとしている点が参考になった。箕輪町でも、障害、ひきこもり、就労、農業等を個別の課題として捉えるだけでなく、関係部署が横断的に連携し、本人の状態に応じて居場所から就労・社会参加までを段階的につなぐ仕組みについて、今後検討していく必要があると思った。

3　鶴岡市　バーンフュージョンソライ
「農福連携と教育事業について」
SORAIは2018年11月に開館した、子どもの遊びと学びを中心とする民間運営の施設である。当初は鶴岡市との連携による運営も想定されていたが、その後、民間主体で施設を運営することとなり、開設当初から施設運営と財源確保を両立させることが大きな課題となってきた。施設内には大型遊具、創作活動を行うスペース、約800冊の本などがある。SORAIでは、単に子どもを遊ばせることを目的とするのではなく、「自分たちの手で、自分の人生や社会をつくっていける」という感覚を子どもたちに育てることを重要な教育理念としている。遊具についても「O歳以上」といった細かな年齢制限や遊び方を極力設けず、子ども自身が、「ここまでなら登れる」「ここからなら飛べる」など、自分の身体能力を判断しながら遊ぶことを大切にしている。SORAIでは学童保育も実施しており、その大きなテーマを「自治」としている。イベントなどを行う際には、実行委員会、広報、会計などの役割を子ども自身が担っている。不登校の子どもなどを対象としたフリースクールも運営していて、単に学校へ行けない子どもの「居場所」とするのではなく、一つの「学びの場」として位置づけていることが特徴である。保護者や子どもが「学校に行けていない」という罪悪感を抱くのではなくSORAIも教育の選択肢の一つであると捉えられる環境づくりをしている。

今回の視察を通して、SORAIは単なる「子どもの遊び場」ではなく、遊びを通じて子どもの主体性、市民性などを育てる「教育の場」として運営されていることが分かった。また、民間施設として、企業との連携やネーミングライツ等によって複数の収益源を確保し、「子どもの機会の平等」と「持続可能な施設経営」の両立を実現している点が参考となった。箕輪町でも、学童クラブなど子どもの居場所を「預かる場所」だけではなく、子どもの主体性や自治を育てる場所として捉える視点が大切ではないかと感じた。

4　酒田市議会

「不登校支援メタバース空間構築などの取り組み」

酒田市では、スクールソーシャルワーカーや相談員の配置、家庭訪問、教育相談室、タブレットから直接SOSを発信できる仕組みなど、多様な不登校支援を行っているが、学校に登校できず、「ふれあい教室」等の支援にもつながっていない児童生徒がいることから、自宅から参加できるメタバースを新たな居場所として導入した。メタバースでは、自分で選んだアバターを使い、他の児童生徒とのチャットや教育相談員への相談、自主学習などができる。教育版ゲーム、クイズ、プログラミング、動画教材のほか、市内イベントや進路情報も提供している。運営は週2回から開始し、令和7年度は5名が登録した。学校の教室には入れない児童生徒が、校内の別室から参加するケースもある。課題としては、利用者が少ないと交流が生まれにくく、入室しても誰もいなければ退出してしまうことなどが挙げられた。一方、複数の児童生徒が参加した際には、アバター同士のチャットによる交流も確認されている。学校内では安心できる人間関係づくりや教職員へのファシリテーション研修を行い、不登校の未然防止にも取り組んでいる。フリースクール等との連携や、不登校児童生徒・保護者を対象とした高校進学に関する説明会など、進路支援も進めている。

今回の視察で特に参考となったのは、メタバースそのものよりも、利用者数だけで費用対効果を判断するのではなく、たとえ少人数であっても、既存の支援につながることのできない児童生徒に手を差し伸べるという考え方の大切さである。メタバースだけでなく、教育相談、学校内の別室、ふれあい教室、民間の居場所、進路支援などを組み合わせ、児童生徒の状態に応じた複数の選択肢を用意している点も参考となった。箕輪町でも酒田市の取組を参考に、学校、教育委員会、家庭、民間の居場所等が連携し、児童生徒が自分に合った学び方や居場所を選択できる、誰一人支援から取り残さない体制づくりを進める必要があると感じた。

全体を通じて

全体を通じて、事業を実施する際の理念と、事業を実施する人のあり方の大切さを感じた。バーンフューションソライは、最初の理念を実現するためには、途中で自治体からの経済的支援が受けられなくなっても、何とか他の方法で収入を得る企業努力をしていた。月山福祉会では、支援の対象の人を「力のある人」として接していることが感じられた。箕輪町でも民間か行政かは関係なく、共通の理念に向かって協働ができるといいと感じた。